

C-38 足部動作と足部着用物について(第2報)

県立米沢女短大 徳永幾く 山水きぬ ○石山和子

目的 歩行は人間の生活行動の中で基本的動作であり、それは性別 年齢により又 はくもの はきものなどの着用物の条件により変化すると考えられる。本報は足部を対象とし、特に老令年代の日常生活の足動作について、動作による変化を究明しようとした。前報では50~70才と20才を主とし、骨格を基にした計測点を設定し、静止時の足部計測を行ったので本報では足型プリントによる変化を同対象に調査した。

方法 足型プリントは、ピドスコープ利用不可能のため色糊を使用し①静止 ②足蹴3cm(下駄ばきの足蹴寸法と仮定) ③歩行最高足蹴(下駄ばきの離地時と仮定) ④歩行 の場合を作製し、プラメーターにより接地面積を測定した。

結果 ①各年齢別 静止時の足部接地面積は高令化に比例した変化傾向はみられない。②3cm蹴上げの場合は高令化する程接地面積が少くなる傾向をみた。③蹴上げ最高時の場合は 年齢加齢による変化の傾向はみられない。④歩行の場合は低年齢程接地面積が大になる傾向をみた。⑤足部動作による接地面積の変化と分量は、踵中央点と第2指中央を結ぶ縦基準線に対しては、足の内側 外側への伸長は年齢差は強ど感じられない、但し横基準線(平沢氏による中足指節関節の位置)に対しては、変化が顕著にみられ、低年齢代はこの線からの伸長はみられないが、高年齢代は外側部が大きく伸長しその特色がみられる。即ち、歩行の接地面積からいえば、歩行足蹴の場合 縦の基準線に対しては年齢差は余りないが、横基準線に対しては高年齢程その差が大きく、足動作の種類により 年齢加齢による特色がみられた。